

長崎自然共生フォーラム News Letter

夏号（第19号） 2016年8月5日 発行

「アメリカの日本庭園」

長崎大学大学院 水産・環境科学総合研究科
教授 五島聖子氏

（平成 28 年 7 月 16 日に稲佐山観光ホテルにて開催された総会に続き、長崎町並みプロジェクトマスタープランや平和公園・爆心地公園整備案のプロポーザル等、地場においても活躍されている長崎大学五島教授の基調講演がありました。その概要について、少しまとめてみたいと思います。来崎良輝）

1. アメリカの日本庭園について

講師はハーバード大学在学時を含め 20 数年間、アメリカ、カナダをベースに研究されており、その中で感じることは、「日本庭園」は、日本人の想う日本庭園ではなく、アメリカ人がイメージとして捉えた日本庭園であるという事であった。アメリカでの日本庭園の歴史の始まりについては、帝国主義の真只中のフィラデルフィア万国博覧会（1876）やルイジアナセンチネラル万国博覧会（金閣寺等の著名な建築物を配置したようなもの）により、日本国が国を挙げて紹介したものであるが、



フィラデルフィア万国博

での日本庭園の造園もなされている。（1906）

箱モノのみを輸出し、その思想、歴史等の具体的な説明を行っていないことにより、イメージのみ輸出されてしまったことにより始まる。（鳥居＝日本庭園のイメージが記憶されることとなる）但し、悪いイメージでは無かったようで、アメリカ人の投資により、アメリカ

ニューヨーク州の富豪トンプソン夫人（とある社長の奥様）による別荘が建造されることになる。この庭園は広大であり、イタリア、中国等他国の庭園も同じ敷地に造られているという。日本庭園を監修する技師は、ワタモリキクジロウという日本人で夫人がニューヨークで知り合いになった人である。ただキクジロウは亡命者であり、日本庭園を造る技術も教育も受けていない人で、日本人だから日本庭園が造れるだろうと判断したか、キクジロウがうまくとりなしたかは定かではない。そ



トンプソン夫人の庭園

して完成した庭園には、お寺のような茶室、神社、仏像、灯籠、鳥居そしていかにも中国人が作ったと想像できる石

橋（作業者は日本人があと 3 人の他は中国人であったことによるものと思われる）が配置され、お寺のような茶室内では、テーブルと椅子が配置され、イギリス風の茶話会がなされていた。悲しいかなこの庭園は、その後北アメリカで最も素晴らしい日本庭園といわれるようになっていくようだ。他方、第二次大戦中の捕虜収容所内では、日本人による日本庭園が建造されている。特に、アメリカ西部に多く配置された日本人収容所（10箇所）の中のマン



収容所内の日本庭園

ザナール強制収容所は砂漠地帯であり、配給される食事を 2、3 時間並んで待つような過酷な状況であったらしい。それを紛らすためか、日本庭園が食堂前などに作造されている。但し、砂漠地帯であるために、石、土、サボテン、コンクリートによる回遊式庭園

を作庭している。病院の前にも作庭してあり、日本人は生きる力（帰国する希望）を日本庭園から得ていたのかも知れない。また、その庭園には、清水寺の滝、天竜寺の石橋を模倣し、大仙院の石の配置の模倣は水が自分の涙と共に



大仙院の石の模倣

2. 日本庭園の治癒効果について

講師は、上述した日本庭園による目に見えないエネルギーを知り、療養に寄与する効果があるのではと感じ至ることになる。まず、アメリカの老人ホームでの実験では、景観による人の感じ方の違いを見てみた。1) オープン（芝生の庭）2) 1点透視 3) 伸びすぎた草 4) ハーブガーデン 5) 日本庭園等による変化では、日本庭園は好きと感じる人が多く嫌という人はいなかった事に対して、ハーブガーデンは嫌という人が多く好きという人がいないという結果であった。アメリカでは、日本庭園よりハーブガーデン的な庭が多いと想像するが、結果は逆という。次に庭園から受ける生理的な反応という研究では、1) 日本庭園 2) ハーブガーデン 3) 1本の木と壁という中で被験者を10分間鑑賞させ心拍数を測定すると、有意に日本庭園は心拍数が低い結果を得た。更にニュージャージー州で認知症患者への効果を研究している。室内に庭園を造り、患者の様子を見ると、治癒効果を得るために作っていたオーディオ室では、寝てしまう患者が多いのに対して、日本庭園の部屋では、寝ることなく、発言する機会が多くなるという。また、再訪したいという希望もままあるらしい。更に日本庭園の部屋では、脈拍がかなり低くなることも見受けられ、考えるためには脈拍を下げるという人間の機能が働いているという。

2年前には佐世保市内の病院でも日本人に対する効果を確認するために認知症患者を対

象として研究されている。庭園はアメリカで作庭した日本庭園に合わせることにした。従来あったテラスガーデンでは、寝る人が多かったが、日本庭園では寝る人は見られない。窓の開閉では閉めると効果が無くなることも確認できた。認知症患者の視野範囲によるものもあるかもしれない。いずれにしても、日本庭園は小さな空間でも効果が見られ、21世紀の医療空間としての効能は今後広まっていくのではないであろうか。

その後、活発な意見交換があり、会長の音空間の感受性とのつながり、庭園の次元等の話が出ていた。日本庭園は作庭すれば終わりではなく、そこがスタートラインであり、自分の考える風景を維持管理により作っていくという考え方は、アメリカに受け入れられるかわからないが、日本庭園の持つ奥ゆかしさは伝える必要があるのかもしれない。小空間に景観を写し込むという日本庭園は日本人の心の中にいつもあるとは思っていたが、現在の庭造りを見ると出来上がりが完成という感じが否めない。日本人の心を伝えていくためには、現在の社会背景も考えていかないといけないように思われた。五島先生の講演は、日本庭園のもつパワーの1つを数値的に表したものであると共に、日本庭園を広めるための1つのプレゼントを頂いたように感じた。貴重な情報提供、ありがとうございました。

連載-

自然配植技能者養成講座

自然配植技術協会 高田研一

今号より自然配植技術協会の高田先生の好意で養成講座資料を掲載させて頂くことができました。緑化について一考する機会になればと思っています。（事務局）

第1章（自然配植緑化と日本の緑づくり）

1. はじめに

この講座は、生態学を学び、山々を歩く中で気づいてきた自然の成り立ちの豊かさと美を、人の手によって荒廃しつつある日本の風土にもう一度よみがえらせたいという願いが

出発点となって2001年に始められたものでした。

幸いにも、願いの受け手、願いの広げ手となる多くの緑づくりに携わる人々を得て、これまで全国各地で、1年間の自然配植技能者養成講座という形で、この知識、技術伝承の場を作ることができました。

自然配植の基本的な考え方も、最近ではずい分と深まってきて、哲学から、経済学、環境論といった基礎理論的な分野から、自然再生、法面緑化、造園、治山、造林、環境デザインといった応用技術的な分野まで含まれる大きな視野が開かれてきています。

21世紀の百年は、それまでの百五十年で蓄積してきたプラスとマイナスの財産を整理整頓していく時代となります。この整理整頓は、社会と人々の暮らしが今以降の長い将来にわたって持続可能とするための膨大で革新的な作業です。

社会の構成員全体が納得して、この改革を広く、深く進めるための理論と実践技術を、自然配植と呼ぶわけですが、この自然配植技能者養成講座では、その出発点となった緑づくりとその周辺分野に特化して、人材を育てることを目標としています。

まず、自然配植という、ふつうの人々にとっては耳慣れない言葉の説明をもう一度考え直してみましょう。

自然配植という言葉は、高田の造語です(高田 2000; 自然配植緑化の基本的な考え方; 京都造形芸大紀要)。しかし、その中身の多くは、わが国の伝統技術の方々でもみることができます。例えば、造園千年の長い伝統の中で培われてきた樹木を用いる技術であり、樹木を配する石組みの技術としてみられます。

これらは、人々が築いてきた技術なのですが、何もないところから生み出したわけではなく、実は、誰でもが野山に行けば発見できる自然の成り立ちをみて昔の匠の人々がこれを洗練させてきました。土石流直後の溪谷の石の積み重なりと千年を経て安定な深山幽谷の石の積み重なりは、明らかに異なっていて、無駄がなく、美しく、しかも大水の発生に対しても変化することが少ない状態です。これをし

っかりと観察する中で、石組みの技術は磨かれます。

同じように、自然界で、植物、森にみる圧倒的な美しさがあって、これを見よう見真似で、わが国では「縮景」という考え方で、狭い人工の空間に再現してきました。

地方には、地方独特の気候風土があり、岩の種類も違えば、その割れ方、風化の仕方も異なっています。植物や動物の種類はおろか、風やそこで暮らす人々の感受性もまた違います。その地方独特の自然のあり方を大切にするところから、自然配植は出発しようとしています。

自然から学んできた伝統技術は、したがって、地域地域の特色を生かした多様なあり方が、いま、あるいはかつては存在してきました。

一様で同質の商品を大量生産することによる利益を享受してきたこれまでの百五十年から、次の百年には、自然の原理によりうまくフィットした、多様で多元的な価値づくりを目指して、細々と残ってきた伝統を守り、あるいは新しい地域の伝統となる自然技術をつくっていくことが私たちの目的です。

自然配植の緑づくりに関しては、基本的には次の5つの考え方の上に成り立つ技術です。

①植栽ないしは播種する樹木とその組み合わせ＝群落あるいは森の性質をよく知っていること

- ・この木はどんな場所を求めているのか。
- ・どの木とどの木を組み合わせれば、木が喜ぶか。
- ・何年このまま続くのか、何年経てば、形や性質がどのように変わるのか。
- ・いつ大人になり、どんな花を咲かせ、実を結ぶのか。
- ・そこにはどんな小鳥や動物がやってくるのか。
- ・群落の中で果たす各々の樹木の役割＝「立つ瀬」を考えることの大切さ。

②土の性質、現場の状況をよく知っており、うまく利用できること

- ・木や草はそれぞれ種類によってどんな生育

環境を求めているのか。

- ・地形や斜面の方位がもたらす土（生育基盤）への影響。
- ・水と土、微生物と土の関係を見直す。
- ・動いた経験のない土と動いた履歴のある土は性質が違う。
- ・土の底でみえない岩盤がもたらす影響…など。
- 「良い土」とは何か。「良い」は誤解しやすい。

③美しい空間構成を実現できること

- ・美しさをどう構想していけばよいかを現場条件に合わせて考えること。
- ・樹木が構成する美しさとはどのような美しさがあるのか。
- ・どの距離で、どの角度で、どの速度で見る美しさかを考えること。
- ・だれが美しいと考えるのかを考えること。
- ・美しさは時間の流れの中でどう変化するかを考えること。

④無駄のない緑づくり

- ・最大の効果を生み出すメリハリの付け方；とくに緑の公益性を担保する景観、防災、生物多様性についての重要性評価
- ・質の高い緑づくりが結局は（ライフコストからみて）安上がりという発想。
- ・微生物、植物のもつ自然回復力を生かす。
- * 土壌の微生物は、どこにでも満ち溢れているが、微生物が豊かであることが、必ずしも重要であるとはいえない。第7，8，9章で考えよう。
- ・使えるリサイクル資材、使えないリサイクル資材がある。特に二次加工コストの高い製品は、品質が良くてもうまく循環しにくいなどの難点もあり、広い目で循環のサイクルが動くかどうかを考えたい。

⑤緑づくりに携わる者が願い、喜び、互いの役割を尊敬できること

- ・計画、設計、積算、施工までの現場でかかわるすべての人達が自分の成果として誇りをもてる仕事とするために工夫が生かす。
- ・対等なパートナーシップで仕事をする。
- ・後輩は先輩を技能、技術の高さゆえに尊敬できるか。

これらの点は、これまでも強調されてきた点でもあります。自然配植は、どこが異なるかといえば、次の点です。

1) 長い目で見て（数十年先以降を考えて）その地域の環境資源（緑地、公園、森林など）として価値が生まれるように、今（現在）の時点で数十年先も含めた具体的な計画をおこなう。

2) この計画を行うために、場（立地）の性質、素材（植物、その他の材料）の性質、社会条件の変化などを具体的に把握する。

* その方法をこの講座で学ぶ。もちろん、これまでの自然の見方とは異なる点も多く含まれている。

3) 場の条件、素材の性質、人の願い、条件のいずれも考慮しながら、これらを現場中心にうまく統合させる工夫が大切です。とくに、現場はすべて条件が違うため、その場その場に応じた工夫を行える専門家が緑づくりの中心になります。

2. 緑化ということ

自然配植で取り扱う緑づくりの分野は、あらゆるものを含んでいます。

言い換えれば、坪庭づくりなどの小規模な造園でも、造林でも、法面緑化でも、治山でも適用することができます。

人々が樹木をいつの時代から植え始めたかはよく分かっていませんが、縄文時代の住居址の周辺からは、トチノキやオニグルミなどの食用果実を採取する樹木が多く見つかり、植えた可能性が高いと見られます。造園は、飛鳥時代の庭園遺跡の存在が知られており、その後、歴史的な記録がよく分かっている平安時代の朝廷では、造園に携わる専門職は、すでに「木守」、「庭掃」、「庭作」に分業化されていたと思われます。

「木守」は植木の手入れや植栽などを指し、「庭掃」は見栄えを良くするための掃除、微生物環境を整え、樹木管理するための落ち葉除去、土の補充などであったろうし、「庭作」は築山や池を配置し、その中に樹木を植え込んで、デザイン性豊かに、あるときには浄土思想を表現しようという作庭家の仕事であったろう。

うと思われます。

作庭という言葉とはやや対照的なニュアンスをもって聞いてしまう言葉に「緑化」があります。

わが国には、「緑化業界」という業界があつて、「造園業界」とは別の業界を築いてきました。この緑化業界は、戦後経済の高度成長の中にあつて、国土開発という名の下に山を削り、膨大な平坦地形を作ってきたときに生み出される巨大な「法面」を、自然破壊ではなく、「開発」とともなう新たな緑地として蘇らせようという目的をもった業界だといってもよいと思います。

※莫大な公共投資によって国土開発が進められてきた過去40年間の間に、急速に拡大膨張してきたのが緑化業界です。しかし、この業界が担ってきた緑づくりとは、生育基盤材を5cmほどに種子とともに吹き付け、牧草やハギ類の群落を急速に造成しようというお手軽なもので、「人工斜面に緑のペンキを塗るだけ」という指摘もあつたほどです。

しかし、時代は今や緑化を通じて、公共原資を社会的に分配する時代は終焉を迎えようとしています。意味のあるところに、意味のある緑づくりが求められるようになってきており、全国一律一様に色を塗るようになってきた「緑化」では通用しなくなってきました。その流れの中で、緑化業界や土木業界は、「ビオトープ」や「生物多様性」といった用語を駆使しながら、新たな緑づくりの付加価値を求めようとしてきましたが、すでにマニュアルで、どの地方でも一様な緑づくりを行おうとすることには限界があることが明らかになってきています。

こうした緑化業界の「緑化」は、狭い意味の緑化です。

「緑化」という言葉は、公園などの都市緑地の造成を含む「緑づくり」全般を指す広い意味で用いられる場合と、山崩れ跡地、伐採地、法面などの樹林が失われて裸地状態となつているところへの植生回復だけを指す狭い意味での用いられ方があります。

広い意味での緑化、つまり緑づくりにはもちろん、造園で取り扱うものも含まれます。ただ、この広い意味での緑化は、個人、企業や社寺仏閣が行う庭作りを含めないことが多

く、また、ここでいう自然配植緑化そのものは比較的メンテナンス密度の低い場所で適用されてきた事例が多かったのも事実です。しかし、自然配植の技術は庭作りの中でも十分活用することができます。それらについては、後の章で少しづつ説明していきます。

■緑化に携わる業界

現在、緑化の施工に実際に係わっているのは、林業、造園、緑化の三業界に及んでいます。この三つの業界は共同して一つの現場に携わることもありますが、行政システムの所管の違いですみわけているようにもみえます。つまり、農水省－林野庁－各自治体林務課－林務事務所系列では、森林組合などの林業関係者が緑化＝造林に携わり、国交省－各自治体土木（または河川整備、道路整備など）課－土木事務所系列では、緑化業界が大きな場を占め、修景性が重要で、維持管理コストが出る公園整備などでは造園業界が緑化を行っていることが多いようです。

これをまとめると、次の表のようになります。

表1. 緑化に関わる三業界

	業界	発注者	受注者	緑化手法	緑化目標	業界の態様
1	林業	営林署、林務事務所など	森林組合など	植樹工中心、低管理	森林回復	地域性の高い業界
2	造園	公園事務所など	造園業など	植樹工中心、高管理	修景	地域性の高い業界
3	緑化	土木事務所、国道工事事務所など	吹付け緑化業など	播種工中心、無管理	法面保護	広域にまたがる業界

上記の業界の実態は、2007年現在、徐々に変化しつつあります。この変化を整理すれば、次のような流れに向かっているのではないかと考えています。

林業：農水省－地方自治体－森林組合の縦割り、資源分配構造は、限界にあり、技術力のある作業班を抱える実力のある森林組合とその関連会社、民間森林施業請負会社が、地方環境総合企業として、幅広い緑づくりに取り組む時代が期待されます。

造園：東京などの大都市圏と地方とでは、業界の態様が分化していく可能性があります。大都市圏では、夏の異常高温や排ガスなどの都市気象緩和としての緑地整備と、富裕層向けの付加価値の高い造園工が主となろうし、地方では、土木や造林との境界があいまいな環境整備として、治山や林相転換も含めた緑

化が中心となるのではないかと思います。

緑化：大都市に本拠をもつ総合緑化企業は、そのマニュアル化された技術力では、地域ニーズに合致しない傾向が生まれており、一律な技術の価格競争のあおりを受けて、収益力も弱まっています。このため、緑化企業は特殊な高い技術をもたないところでは、将来は厳しいものがあるかもしれません。

なお、林業は木材価格の下落による生産性の低さから、長い間の低迷期にあり、造林、間伐、林道整備などに税源を用いてきましたが、民有林を対象とした公共原資の分配には限界があり、一方、国有林の抱える膨大な累積赤字は、やがて国家財政を圧迫する要因となっています。むしろ、すでに国家財政自体が逼迫しており、緑化に投じる費用の捻出が不要不急のものとして縮減されていく傾向もあります。

このような流れの中で、国土の三分の二を占める森林を一樣に手入れするのではなく、コスト以上の効果（ベンフィット）が期待できる立地では、民間資金も利用しながら、積極的に観光などを目的とした林相転換を図っていくという機運もあります。

付加価値の高い森林の育成については、この養成講座の最後に考えてみたいと思います。

■樹林化

牧草による急速緑化を進めてきた緑化業界も、最近ではどこでも樹林化ということが柱となってきているようです。これは、近年、CO₂吸収効果、コスト縮減、生物多様性保全ということが盛んに言われるようになったお陰でもあります。

樹林化とは、木を植え、あるいは種子を蒔き、森をつくることをいいます。ただし、人間はこれまで自然の森のように高、中、低木からなる複雑な構造の森林を人工的に作り上げることができなかったために、森林かとは呼ばずに、少々控え目に樹林化と呼んでいると理解しておいてもよいでしょう。

森をつくることの最たるものは林業における植林です。林業では、建築資材や造船資材、燃料材、パルプなどに供する木材を得るため

に森を伐り開き、伐り開かれた跡に苗木を植え付けてきました。

森林の伐採後に苗木を植えることは、苗木が数十年後に至るまで役立つほどには育たないという生長の遅さゆえに、「子孫のために残す」という名の下に、間違いなく一種の美德として考えられてきたわけです。

この美德は、生活のゆとり、物心ともの豊かさがある初めて成り立つものであることは、テレビに時々映る北朝鮮の樹林を欠く山肌をみれば一目瞭然でしょう。繰り返される森林伐採は土壌の流亡を招き、植林しても苗木が育つには熾烈な環境になり過ぎています。

わが国でもこのような荒涼たる風景は近年まで西日本を中心にあちこちに存在してきました。その内の代表的な例として、平城京建設にともなうヒノキ伐採によってハゲ山化した滋賀県南部の山々、いわゆる湖南アルプスが頭に浮かびます。また、兵庫県の六甲山系でも長い間ハゲ山状態でした。ただし、六甲山や犬山などでは明治以降の砂防事業による植林で段切りという生育基盤をうまく作る方法で、森林が著しく回復しています。

■林地回復基準による植栽密度と自然配植

今、法令的に定められた樹林化についての基準は、林野庁が林地回復基準として定めた2000本以上/haや各府県の林務課で定めたこれと同様な植栽密度だけです。そこで、法面でも違法造成を受けた裸地での樹林化でさえ、2000本、あるいは3000本の苗木を植えることになっています。

ところが、この2000本という数字は、林野庁の長年の経験で、色々な地形条件の下にある森林表土の存在する場所で、スギなどの高木苗木が成木年齢に達したとき、森林の林冠の植被率が100%になるように定められた基準ですから、建設省などが行う表土がはぎ取られた裸地部分では当然条件が異なるはずです。

開発裸地に多い表土がはぎ取られている条件の下や、クズなどが覆い尽くしている荒廃した群落の下では、必ずしも苗木が大きくなり、樹林化に失敗するケースがよくあります。

また、林野庁はスギやヒノキなどの経済樹種による造林だけを念頭に置いていますから、苗木の生長にともなう枯損率を考慮すると、現在求められている環境林としての機能、生物多様性保全としての機能を充足する森の下層植生となる低木や、中木（亜高木）を植えるだけの余地が出てこないことも大きな問題です。

植栽本数がいくら多くとも、植栽時に低木や、中木を高木とともに植栽して、これらが長い年月にわたって生き残らせるだけの理論をこれまでだれも呈示してきませんでした。

自然配植緑化は、この意味で初めて、多様な樹種を長い歳月共存させることができる（はずの）理論です。したがって、面積当たりの導入樹種数をこれまでのどの樹林化手法よりも多く設定できます。

※樹林化の過ち

ところで、苗木を植えることが本当にいかなる場合でも美德でしょうか。

昭和9年に西日本を中心に大被害を与えた室戸台風は、京都でも東山三十六峰のアカマツ林をなぎ倒しました。そこで、これをみた市民が森林回復のための浄財を寄せ、この基金によって大木となって森をつくる常緑広葉樹のシイの木を一斉に植え付けたわけです。

この結果できあがった森は、森というにはこれをかたちづくる樹木の種類が少なく、同じサイズのシイがまさしく林立し、この広い樹冠が光を遮り、漿果をつける低木類が少なく、小鳥もセミも姿を見かけることは少ない。私は学生を連れ、毎年この植林によって出来上がったシイ林を歩き、やってはいけない森づくり、樹林化のお手本として教えることにしています。

しかし、過ちは、必ずしも過ちではない。逆にいえば、正しいことは実は過ちにもなるというレトリックは生態学が教え、仏教的な価値観にもみられるところです。

樹林化手法の過ちと断ずる根拠は、最終的には、

1) 人間を中心において、木材資源、観光資源、防災的資源、レクリエーション資源などの環境資源的価値があるかどうか、

2) 人間を含む生態系の観点から、多様性保全に寄与するかどうか、の二点からの判断に基づくはずです。

東山のシイ苗木の植栽や、数打てば当たる式の苗木植栽の事例は、両方の観点からみても正しい選択であったとはどうも思えません。

このような樹林化手法の正邪の判断は樹木の生長があまりにも遅いゆえにきわめて間違いやすいものです。

一方、現在の樹林化の現場で、例えば、生長の速い先駆種に加えて生長の遅いイロハモミジの播種が行われることがある。当初、これらの稚樹、幼木は、よく共存するため、イロハモミジがやがて失われてこれが過ちの選択であったと分かるには10年を要します。ただし、よほど播種現場の生育基盤の条件さえ良ければ、これが成功する場合がありますが、そのための条件すら未だに整理されていないのが実情です。

私たちは、このような中で、作り上げる緑も作る人間も共に育つ、過ちの少ない緑づくりを進めようとしているわけです。

話を最初の造園に係る話題に戻しましょう。これまで造園という分野での緑づくりで、かけられるコストは平米当たり数万円、場合によっては十万円以上もかけるといふ仕事ばかりであったと思います。そこでは、これを維持していくために多大の維持管理経費が必要とされてきました。

今、平安時代の昔の三職、「木守」、「庭掃」、「庭作」を思い出してみましょう。

作ることと維持することは、造園職として一体の業務でした。

わが国は、都市緑地面積がまだまだ不十分で、今後も行政は緑地づくりを行っていかねばなりません。財政事情からみて「庭作」はできても、「木守」、「庭掃」に大きなコストをかけることが益々困難になってきています（このため、市民参加の枠組みを作ろうとしています）。また、「庭作」はより安いコストで、あるいは元が取れるなら金をかけてもよいと考えています。

こういった社会情勢の中だからこそ、専門家が専門家として仕事ができる環境を作り上

げていかなければなりません。

3. 西洋の発想と日本の発想

西洋＝欧米の思想、とくにアメリカで発展したプラグマティズム哲学＝「見えるものを大事にする、数えられるものを頼りにする」が今や生活、経済、学問の隅々にまで浸透しており、これがグローバリズム（地球主義）として、わが国でもスタンダード化してきました。

緑づくりの分野でこの欧米化が急速に進んだのは、やはり日本が高度成長を始めてからです。これはあちこちで大規模な公共緑地の造成が始まるのと軌を一にしています。

西洋の庭園というまず頭に思い描くのはベルサイユ宮殿などにみる幾何学整形形式庭園です。このような幾何学整形形式庭園はフランスのみならず、イタリア、スペインなどでもみられますが、ヨーロッパの単調な自然風土の中で発達してきた様式だとされますが、もとの起源はギリシャにあります。ギリシャの奴隷制社会を支配する階級に生まれた知識人たちは、支配側の正当性を神に頼らず、論理、哲学に求めました。その中で見いだされたのは「発展」の思想であり、幾何学性の内に潜む「美」でした。規則性、対称性における美のあり様は現実の庭園に生かされることとなりました。

一方、遊牧社会の伝統の中で、個人の自立性のもっとも尊重される美德となりました。同時に、さまざまな社会的要因の複合によって、日本のように柱で屋根を支える軸組みの家屋ではなく、合成パネルなど（かつて西洋では、レンガや石材）で作る壁組みの家屋を徐々に作るようになっていきます。これらは、日常生活において、「不連続性」を重視する文化を生み出してきました。

つまり、「自他を区別する」価値観が文化的規範として成立しているのが欧米の思想ということになります。

この文化的規範が規則的、幾何学的な美意識と融合しながら、西洋のさまざまな幾何学整形形式庭園を作り上げてきたと理解してもよいのではないかと思います。

ここでは、植栽は人間の頭脳がデザインした美に向かって構成されており、地被類や中、低木は線形を成し、高木はモニュメンタルな

大小の点となります。こういった庭園では、人間の存在は、あくまでも「美の観察者、認識者」であり、庭園の構造に対して対置的、対立的な存在です。庭園内では、動線はあくまでも観察通路であり、この通路は庭園の幾何学性を補強しながらも、観察者にとっては、水族館の通路と同様に、水槽の一部を構成するものではなく、植栽空間とは異なった空間を構成するものとなっています。（ちなみに、江戸初期に多く造られた大名庭園も回遊式の散策道を中心とした自然と観察者を対置させる構造と言えるかもしれません。）

このことの意味は重大です。通路を歩く人間と植栽空間の間には、明確な「不連続」を置くという設計となっていることです。つまり、人間と自然との間に「バリヤー」を設ける思想が息づいているということになります。

ちなみに、文化的には遅れていたイギリスでは、形式主義的なヨーロッパ本土の庭園への反発から、18世紀になって盛んに自然風景式庭園という様式に基づく造園がなされるようになってきました。その後、世界中の植民地から持ち込まれた多くの植物を加えて、色とりどりに雑然とした空間構成の庭ができました。最近、日本でも流行のイングリッシュガーデンはこの系譜を引くものです。

自然風景式庭園は、田園の樹林と牧草地、畑、水辺が織り成すバランスの美を庭園の中に実現しようとした、一種の自然回帰主義的な庭です。ヨーロッパ本土とは異なった形式ですが、共通した思想がその底辺には流れているようにみえます。

つまり、自然形の樹林が存在するようにみえながらも、膝から上、頭の高さに至るまでの見通しが十分に確保されていること、樹木、池、芝生などを一つ一つの部品として、観察者から一定の距離をおきながら、バランスの美の中で再構成しようとしていることなどは、人の回りから自然を排除するとともに、自然をあくまでも観賞の対象として設定しようとしているところは、幾何学式庭園のもつ自然と人との対置という思想と合い通ずるものがあるのではないかと思います。

こういった西洋式の庭園とまったく異なった思想をもつものが日本庭園です。

日本庭園の表現形式はきわめて多様です。あるところでは、磯浜、溪流、滝を模す自然の凝縮を追求しながら（磯浜石組、流れの技法、滝組）、別のところでは、これをどんどんデフォルメした抽象的表現としての枯れ山水があり、また違うところでは、宗教思想の表現としての浄土式庭園などを作っています。

自然を模した庭園は、イギリスの自然風景式庭園と似てはいますが、本質的に大きく異なります。

日本庭園では、作庭師が、自然を構成する骨格を自然の中から抽出する涙ぐましい努力を行った様子を感じとることができます。この骨格とは、人が自然にあって美しいと感じたことの要素をいかに限られた空間の中で再生しようかという努力の後でもあります。

そこでは、樹木にも石にも顔と背を区別し、見られる角度を意識しながらも観賞者の存在をその庭の構成の外には置いていない。つまり、すぐれた日本庭園は観賞者がいようといまいと庭自体が一つのまとまりとして魂を持つように考えられているわけです。これは、「伝い」や「仕切り」などバリエーション豊かな空間の中でも通路となる空間が孤立しないような一体感によって設計されます。この一体感は、途切れることなく庭全体、あるいは軸組によって空間を開放された家屋をも含む全体へと広がっていきます。

すなわち、日本の造園技術の中で培われてきた伝統とは、自他を区別せず、連続しながら移り行く有形無形の自然の凝縮であり、対置的に置かれた素材も、対象と観察者も、すべてが全体として一体性をもつような構造を生み出そうとするものだと思います。

この一体感は山に似ていて、山は自ずと人為に境界を引くことなく一つのものと認識されます。一方、西洋の庭園の場合は、平野の文明であるがゆえに、人為で引かれた境界を必要とするのかもしれませんが。

境界＝バリエーションの存在は、ただ単に垣根があるからバリエーションがあるとは考えないで下さい。垣根があってもバリエーションフリーであることもあるし、垣根がなくともバリエーションがあることもあります。

例えば、園路（通路）沿いに帯状に列植され

た地被類は、それがいかに背が低い植物であったとしても、明瞭な境界を形作り、見る側と見られる側を分け隔てることとなります。この結果、子供達は、五感を使った緑との多様な関わりを奪われ、老人は包容感の乏しい空間に取り残されることになるといった見方もできます。

わが国経済の高度成長の中、大規模な土木造成が行われ、そこで熱狂的に迎えられてきた緑づくりの思想とは実に西洋式庭園の思想でした。

なぜなら、この作庭術が幾何学的、規則的であるがゆえに、数量化しやすいこと、現場の工夫を必要としないことにあったからです。

設計者が現場も見ずに図面を引き、図面通りやっておればできる緑づくりであったからこそ、全国どこでもだれでもが施工できる一定の水準をもった公共緑地が生み出されてきたわけです。

この結果、緑化に係る業界は大発展してきましたが、造園技術は衰退していきました。

この章の最後にわが国の森林の悲惨とも言える状況について触れておきます。

1990 年頃からシカが急激に増加して、2000 年代に入ると北海道から九州、さらに屋久島まで森林の被害が目立つようになってきました。人々が利用し続けてきた里山が放置され、一部がスギやヒノキが植えられてきましたが、その人工林を含め、すべての里山が傷んでいます。しかし、もともと自然の豊かさという点では、人の立ち入りが少ない奥山と呼ばれる標高の高い森林の方がずっと価値が高いのですが、いま、この奥山の傷み方も里山以上に厳しい状態にあります。緩斜面地では多くの場所がシカによって実生や幼木が食い荒らされて、健全な森林の維持が困難となっています。私たちは自然配植の担うもう一つの分野として、このような事態から森林を守り、育てる自然保護分野を考えていく必要がありますが、詳しい点については後章に譲ることとします。

西田厚志氏副会長就任、 よろしくおねがいします。

事務局

今年度より、長崎県造園建設業協会長の職に西田造園土木株式会社の西田厚志社長が就任されました。おめでとうございます。また、総会において、当フォーラムの副会長への就任も快く引き受けていただきました。重ねて御礼申し上げます。忙しい中、時間を割いていただくこととなりますが、今後ともよろしくお願い致します。

ブックトラベル 最近の読書から

●生麦事件（吉村 昭）423pp.

鶴見区生麦の生まれの因縁もあって、久しぶりに長編歴史小説を読んだ。生麦事件によって薩英戦争が起こり、ほとんど並行して外国軍艦と長州藩との間で下関海峡での戦いも起こった。この二つの戦争が幕府崩壊の原動力となったとの作者の弁だが、協議と合議を重ねた、当時の武士と民はえなかった。国会討論を見るたびに、もう少し頑張ってくれよといいたくなる。（川里弘孝）

事務局だより

事務局長交代と共に編集担当も川里弘隆から来崎良輝に交代します。農学系から工学系に変わりますが、皆様のご支援を今後ともよろしくお願い致します。

編集後記

梅雨が明け、クマゼミの合唱が体感気温をさらに上昇させる。閑さや岩にしみ入る蝉の声と芭蕉は詠んだが、私には涼しさを感じる俳句である。7月の山形県での俳句であるらしく、セミはニイニイゼミのようだ。

やかましいにもかかわらず芭蕉が「閑さや」とおいたのは、この「閑さ」が蝉の鳴きしきる現実の世界とは別の次元の「閑さ」だからです。そこで本文に目をもどすと「佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ」とあって「閑さ」は心の中の「閑さ」であることがわかります。

芭蕉は山寺の山上に立ち、眼下にうねる緑

の大地を見わたした。頭上には梅雨明けの大空がはてしなくつづいています。そこで蝉の声を聞いているうちに芭蕉は広大な天地に満ちる「閑さ」を感じとった。本文の「佳景寂寞として」、あたりの美しい景色はただひっそりと静まりかえって、とはそういう意味です。このように「閑さ」とは現実の静けさではなく、現実のかたに広がる天地の、いいかえると宇宙の「閑さ」なのです。梅雨の雲が吹きはらわれて夏の青空が広がるように、突然、蝉の鳴きしきる現実の向こうから深閑と静まりかえる宇宙が姿を現わしたというわけです。

やはりイメージ先行で勝手な判断は危険でした。「アメリカの日本庭園」より得たものを自身においても教訓としないといけませんが、右から左へと流れて留まる事のないこの空虚な空間は如何ともしがたいものがある。

（引用 <http://textview.jp/post/hobby/10048>）

今回から省力駄文にお付き合いいただくこととなりますが、よろしくお願い致します。

五島先生、川里さん、牧さん、協力ありがとうございました。（Ku）

【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。字数も問いません。何でも送ってください。今までは、川里さんにおんぶにだっこ状態で記事を提供頂いてきました。私には文才もありませんので、皆様の協力があって成り立つニュースレターです。よろしくお願い致します。

事務局 会長 宮原和明

〒850-0036 長崎市五島町 3-3-206

NPO 環境カウンセリング協会長崎内

TEL : 095-818-3305 / FAX : 095-826-3693

HP : <http://www.nature-man.org/index.html>

E-mail : kurusaki-y@hotmail.com

NL 編集担当 : 来崎（携帯）090-4989-1440

事務補助 : 牧（携帯）090-7161-5408

事務局長 大塚慎一

〒856-0028 大村市坂口町 500-5 (株) 琴花園

TEL 0957-53-8121 FAX 0957-52-4823